

Documentation and Achievement 2016-2021,
Department of Architecture,
School of Science and Technology,
Meiji University

FY2016 Re-Inventing Japan Project Type B

平成28年度 大学の世界展開力強化事業(タイプB)



明治大学理工学部建築学科 /
理工学研究科建築・都市学専攻における
2016年―2021年の記録

FY2016 Re-Inventing Japan Project Type B

Preface

Tomoaki Tanaka

はじめに

この冊子は、2016年度に明治大学が採択され、2020年度までの5年間にわたり取り組まれた大学の世界展開力強化事業「CLMVの持続可能な都市社会を支える共創的教育システムの創造」について、理工学部建築学科および理工学研究科建築・都市学専攻を中心として、その取り組みの全貌を紹介するとともに、5年間の事業の成果に基づく未来への発展可能性を展望することを旨として編纂したものです。

以降でも詳しく述べますが、本事業は、文部科学省・平成28年度「大学の世界展開力強化事業～アジア諸国等との大学間交流の枠組み強化～」タイプB(ASEAN地域における大学間交流の推進)に、本学が政治経済学部、情報コミュニケーション学部、理工学部・理工学研究科の3部局により構想を提案したものです。そして、8つの採択プログラム(国公立大学6校、私立大学2校)の1つとして採択されたことを受けて、本学では5年間の事業期間に多面的・多層的な事業を実施してきました。理工学部・理工学研究科では、建築学科および建築・都市学専攻(国際建築都市デザイン系/I-AUD)がJABEE建築系学士修士課程認定プログラムを擁しているため、学士課程と修士課程を接続した国際通用性を備える6年間の教育プログラムの中に、アセアン地域6カ国7校の連携校との送り出し/受け入れの学生交流プログラムを、複層的に開発・構築して実施してきたという点に、その特色があります。

近年、CLMV(カンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナム)諸国を含むアセアン地域の経済成長は目覚ましく、これに伴って急速な都市化が進行しています。このような都市化には、経済成長を支えるポジティブな面がある一方で、都市の過密と地方の過疎、環境破壊、公害問題、地域的な経済的格差等を生み出す危険性を孕んでおり、持続可能な発展に向けて各々の課題に対して、多分野の人材の協働によるアプローチが求められています。そこで、本事業では日本の学生とアセアン地域の学生が共に学び協働する場をつくることで、自国の問題の特殊性を自覚した上で、共通の問題にアプローチする能力を養い、新たな価値形成(共創)を実現できる人材を養成することを目指しています。そして、前述のような状況や課題に応える「先進的なアジア型の将来都市構想」と、これを実現するための「共創的教育システム」を創造することを目標としています。

5年間の最終年度となる2020年度が始まる目前のタイミングで、世界で新型コロナウイルス感染症の蔓延が拡大し、それ以降現在まで人の移動を伴う実空間での学生交流プログラムは全て中止せざるを得ない状況が続いています。しかしながら、そのような状況下であっても物品、情報やサービスは活発に国境を超えた移動が行われています。そして、グローバル化が進んだ国際的環境においては、そのようなモビリティを支える信用性や価値の相互認証は変わらず重要なテーマとなっています。建築・都市学分野では、その対象とする建築や都市が場所に定着しているという性格を持っているため、学生や教員が他国の都市へ移動することによって、まさにその都市自体やそこに生じている事象を生きた教材として、課題解決型の学びの機会を創出することが可能となります。上記の事柄は、まさに関わってきた私たちが本事業を実施するプロセスの中で、様々な学びの機会を共有する中で、即地的に相互の認識を深めながら、自覚的にプログラムの開発や運営にフィードバックしてきた知見でもあるのです。そのように発展的に実施してきた5年間の取り組みの全貌を、そして、そこから生まれつつある未来への可能性を、本冊子から感じ取っていただければ幸いです。

Recent Developments and Strategies for Internationalization of Department of Architecture, Meiji University

Tomoaki Tanaka

過去10年間ほどの明治大学、そして、理工学部建築学科および理工学研究科建築・都市学専攻の取り組みは、同時代の高等教育あるいは建築教育をめぐる国際化への潮流の中で進められてきたものである。本学の国際化は、2009年のグローバル30プログラム採択を契機として大幅に強化されてきた。留学生の受け入れ/送り出しの大幅な拡大を目的として、学内では国際連携本部が創設され、協定校の拡大や国際化プログラムの増強が推進されてきた。

建築学科および建築学専攻(2011年当時)では、協定校の拡充や国際共同ワークショップ実施など教育交流プログラムの開発・実施を段階的に進めてきたが、大学全体の取り組みの進展と並走する中で、中期的戦略として国際化をさらに強化する方針を打ち出し、2013年の中野キャンパス開設に合わせて、建築学専攻に国際プロフェッショナルコース(I-AUD)を新設した。I-AUDは、2年間の修士課程の専門教育を英語で提供するプログラムであり、日本語で教育を行う既存の建築学科の学士課程と組み合わせ、UNESCO-UIA建築教育憲章に準拠する6年制カリキュラムを構築している。

I-AUDの開設準備期中に、本学はグローバル人材育成事業や大学の世界展開力強化事業(ASEAN)に採択され、独自の海外教育拠点として明治大学アセアンセンターを2013

年にバンコクに開設した。この頃には、欧米の協定校に加えて、アセアン地域の大学との関係が深まり、シンガポール国立大学(NUS)の環境・設計学部やチュラロンコン大学建築学部との部局間協定が締結され、国際共同ワークショップや協定留学による学生交換が実施されるようになっていった。NUSでは英語で教育が提供され、チュラロンコン大学は英語で教育を行う国際デザイン・建築プログラム(INDA)を擁しているため、本学が英語トラックのI-AUDを開設したことで、相互乗り入れが加速し大きな効果を生んだ。また、学年暦への整合を考慮し干渉がない時期を見出してワークショップを開催した点、相応の単位付与を伴う協定留学の仕組みを構築できた点なども効果的であった。特に前者については、好立地にあるアセアンセンターを最大限活用して、夏季休業期間に送出プログラムを開発できた点も大きな効果を生んだ。

序文でも触れたように、グローバル化の進行に伴って国境を超えた人、モノ、サービスの移動は急速に拡大し、国という枠組みを超えた価値やルールが必要とされている。そして、そこでは「国際通用性」の確保が重要なテーマとなっている。この「国際通用性」という用語は単なる互換性や同一性を意味するのではなく、異なる国や地域の間で相互の差異(各々の地域性や文化の独自性)を尊重しながら、本

明治大学国際化年表			
	明治大学の取り組み	建築学科／建築・都市学専攻の取り組み	建築教育をめぐる潮流
2008			UNESCO-UIA建築教育憲章に基づく建築教育の本質的同等性を相互認証するキャンベラ協定が締結
2009	文部科学省グローバル30プログラムに採択		
2010			
2011			JABEEがUNESCO-UIA建築教育認定の条件付き承認を取得(2012年に対応を明確化し建築系学士修士課程認定を開設)
2012	文部科学省グローバル人材育成事業、大学の世界展開力強化事業(ASEAN)に採択		
2013	バンコクに明治大学アセアンセンター開設	建築学専攻 国際プロフェッショナルコース(I-AUD)を新設	
2014	スーパーグローバル大学創成支援(SGU事業)採択		JABEEがキャンベラ協定に暫定加盟
2015		JABEE建築系学士修士認定を審査し認定を取得(併せて、エンジニアリング系学士認定も取得)	
2016	大学の世界展開力強化事業(CLMV)に採択		
2017		理工学研究科が専攻を再編し、建築・都市学専攻を新設(JABEE建築系学士修士プログラム認定生には修士(建築学)の学士を授与)	
2018			
2019			JABEEがキャンベラ協定に正式加盟
2020		テンブル大学のDBMDプログラム(建築分野)を開始	

Recent Developments and Strategies for Internationalization of Department of Architecture, Meiji University

Tomoaki Tanaka

明治大学と建築学科/建築・都市学専攻の近年の取り組みと国際化への戦略

田中友章 明治大学理工学部建築学科主任教授

質的に同等であることを認め合うこと、そして相互認証に基づいて別の場所でも信用性が発揮できることを意味している。建築学分野では同様の議論が進んだ結果、1996年にUNESCO-UIA建築教育憲章が採択されている。そして、同憲章に基づく国際的な質保証の仕組みとして、UNESCO-UIA建築教育認定評議会による認定システムが運用されている。このような動きと並行して、従前から実績を重ねてきた諸国の認定機関は、本質的同等性を相互認証するキャンベラ協定を2008年に締結している。I-AUDの開設準備段階では、このような国際的な潮流は明らかになりつつあった。よって、I-AUDでは国際性豊かな高度専門職業人の育成を目指して教育を行うとともに、外国人学生を含めて国内外から学生を集めて、多様性のある教育環境を提供する方向で準備が進んでいった。

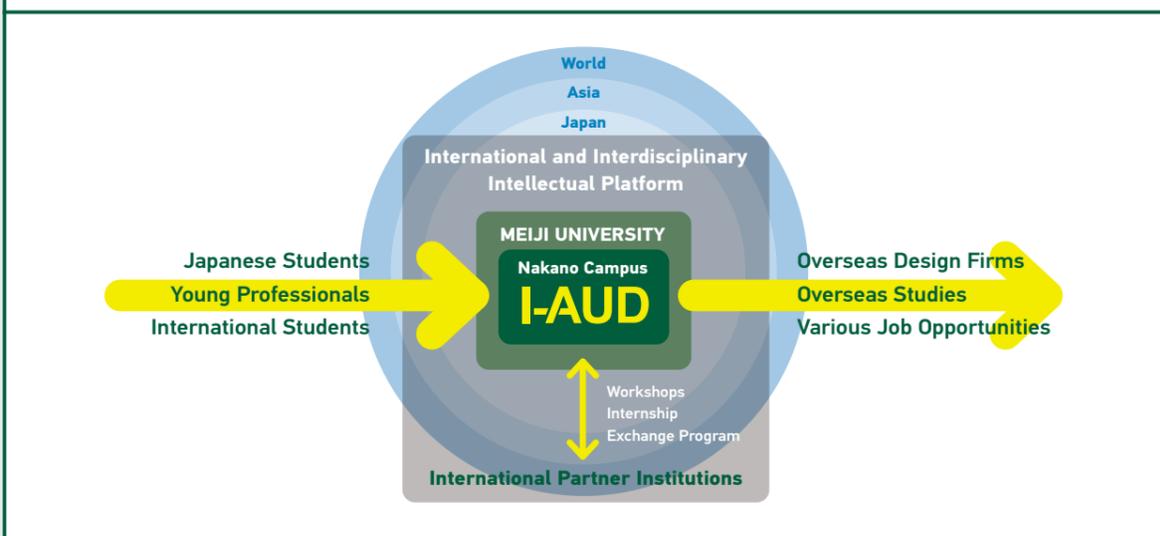
この頃に、JABEE（日本技術者教育認定機構）は、ワシントン協定対応のエンジニアリング学士認定に加えて、UNESCO-UIA建築教育認定の条件付承認を取得して2012年に建築系学士修士課程認定を開設していた。従ってI-AUDでは、UNESCO-UIA建築教育憲章に基づく学士+修士の6年間の教育プログラムを構築し、1期生が修了するタイミングでJABEE認定を取得する方針となった。その後、JABEEはキャンベラ協定への2014年の暫定加盟を経て、2019年に正式加盟を果たした。同協定による本質的同等性の相互認証は、本学における国際的な建築教育の推進、質量ともに高いレベルのモビリティの提供、修了後の多様かつ確かなキャリアパスの支援の各面において、その互恵性がもたらす効果をもたらすことになるだろう。

これらの成果として、本学はJABEE建築系学士修士認定を2015年に取得し、現在（2020年度末）までに128名のJABEEプログラム修了生を送り出してきた。そして、2017年の理工学研究科の専攻再編に合わせて、建築学系、国際

建築都市デザイン系、総合芸術系からなる建築・都市学専攻を新設し、JABEEプログラム修了生には国際的にも認知されている修士（建築学）の学位を授与することとなった。キャンベラ協定は、日本も含めて10つの国と地域の教育認定機関が加盟し、世界各国400以上の教育プログラムを包括するプラットフォームへと発展してきている。特筆すべきは、加盟機関のうち半分の5機関（日本、中国、韓国、香港、台湾）がアジアに立地していることで、今後はアセアン地域へも広がっていく可能性もある。よって、ポローニヤ宣言により加速した欧州に類するような学生モビリティを備えた高等教育圏がアジアにも形成されるという近未来像を描くならば、本冊子で紹介する事業はそれを先取りしている面があるといえよう。

本事業の構想作成やプログラムの開発にあたっては、これまでに蓄積された本学の国際化資源の強みを最大限活かすことが目指された。JABEE認定の副産物として、学習・教育到達目標の設定やカリキュラムの体系化が完了し、質保証を伴う単位や学位授与の仕組みが構築されていた。また、建築系学士修士認定に起因して、修士課程への進学段階で学生の到達度の同等性を確認する仕組みも構築されていた。加えて、6年間のカリキュラムは、基礎入門から専門基礎を経て大学院の専門（包括）という3つの発展段階に分節され、対応するかたちで設計演習系科目の学習目標や授業運営方法の整序が完了していた。これらのことから、本事業の派遣プログラムは、カリキュラム構成に回答した3つの発展段階として構成し、国際実習（建築版）、チュラロンコン大学短期留学、2都市型ASEAN国際共同ワークショップという3つの派遣プログラムを開発して実施した点が大きな特徴である。また、NUSやINDAに加えて、CLMV諸国の有力校を迎え、6カ国7校の連携校と本学の間で多面的に教育交流を展開できた点も大きな特徴である。

I-AUD 構想ダイアグラム

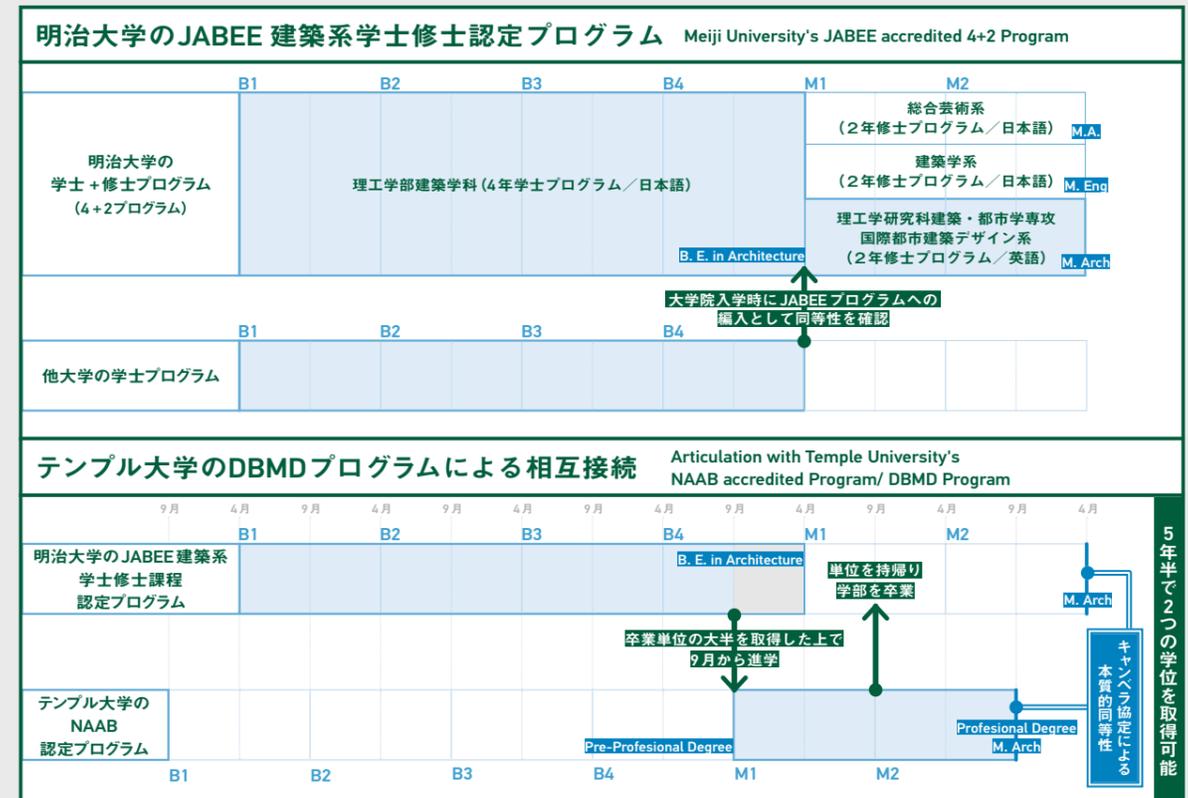


キャンベラ協定の実装が進むにつれて、本質的同等性の相互認証により、質保証に基づく信用性やモビリティに関する互恵性が増進する段階が近づきつつある。本学の例でも、高年次のI-AUDで英語教育が提供できる利点を活かして学生交流を加速させる場面では、その有効性が実績を伴って確かめられている。学生交流には単位の移動も伴うので、カリキュラム間で相互に科目マッピング等を行い単位付与の仕組みを整えているが、このような場面でも国際協定に基づく質保証の枠組みが役立つことは言うまでもない。

本学の学士修士の接続による6年制カリキュラムは、米国のNAAB認定でも多く見られる4+2プログラムと呼ばれる仕組みに類似する面があるため、それを発展的に応用することで、テンブル大学との間でデュアルディグリー・プログラムの構築が可能となった。テンブル大学ではDBMDプログラム(Dual Bachelor's Master's Program)を全学的に運用しており、協定校と課程を接続して学士と修士の双方の学位を提供する仕組みとしている。建築分野でもタイラー芸術・建築学部が提供する同プログラムへの乗り入れが模索され、キャンベラ協定に基づく本質的同等性を前提として、本学の学士取得を大学院への進学条件を満たすものと評価して、テンブル大学の修士課程に接続する仕組みが完成した。このプログラムでは、本学の学部4年生が卒業必要単位のほとんどを取得した段階で春学期終了後に渡米し、9月からテンブル大学の修士課程に進学する。そして、先方で取得した単位を持ち帰って本学の卒業条件を満たし

た上で、2年間の修士課程を修了することで、本学の学士号とテンブル大学の修士号の双方を取得する仕組みとなっている。このように一級建築士と米国建築家資格の双方の教育要件を満たす2つの学位を、通算5.5年で取得できるDBMDプログラムが完成した。今後の学生の参加はまだ未知数だが、キャリアパスを多様化し、その選択肢を豊富化する上では有意義な前進だと考える。

米国ではコミュニティ・カレッジを経て大学に編入・卒業し、大学院に進学するケースもあり、戦略的に2+2+2の接続によりNAAB認定プログラムを提供する事例もみられる。上述のDBMDプログラムに見られるような相互接続のさらなる発展形を展望するならば、母国の第一都市で2~3年の基礎入門教育を受けた上で、第2都市に移動して専門基礎教育を終えて学士を取得し、さらに第3都市に移動して大学院で包括専門教育を受けて修士を取得するというように、段階的にステップアップしていくモデルも構想できるだろう。複数の国や地域のプログラム間で、各発展段階に相応しい達成度の同等性を確認し、学生へ確かなモビリティを提供することで、学生たちが都市を移動しながら建築・都市についての学びを深める、というポストコロナ時代の未来像を展望できるかもしれない。そのような視座から本冊子の報告を省察するのならば、本学がアジアにおける建築分野の高等教育圏において重要な結節点となる位置を獲得するために、それは確かに意味のある試みであったと理解することができるだろう。



FY2016 Re-Inventing Japan Project for the Type B category (ASEAN),
Support for the formation of Collaborative Programs with Universities in Asia.

全体構想に向けて3つの取組部局による活動を束ねる仕組み

2016年度の初頭、大学の世界展開力強化事業・タイプB「ASEAN地域における大学間交流の推進」へ本学として申請すべく構想の作成が行われていた段階で、本事業への参画を表明した3部局(政治経済学部、情報コミュニケーション学部、理工学部・理工学研究科)のディスカッションの過程で浮上してきたテーマが「都市化」をめぐる諸問題であった。本学は、2021年に創立140周年を迎える大規模私立大学だが、現在は東京都市圏に4つのキャンパスを持ち、10学部16研究科を擁する都心型総合大学となっている。申請時点では、2013年に開設されたバンコクに立地する本学アセアンセンターを拠点として、各部局がASEAN地域の協定校と連携して各種の国際的な教育交流プログラムを開発して実施していた。従って、これらの既存の取り組みの資源や強みを最大限活用して増補・再編することで、今回の公募事業が目指す方向に相応しいテーマ、事業内容や実施手法を組み立てていく方針となった。

高度経済成長に伴う都市化は日本もかつて経験してきたことで、そのマイナス要素を克服し、プラス要素へと転換することで、より成熟した都市社会の構築へと向かってきた。また、アセアン地域においても各国で経済成長の状況は異なり、それに伴う都市化も異なるフェーズの中で進行している。従って、このような時間的位相の異同を利用し

て過去から未来への省察により、相互に学び合い人材育成を進めることができるはずである。このような考えから、本学の構想「CLMVの持続可能な都市社会を支える共創的教育システムの創造」は提案されている。そこでは、国連で採択された「持続可能な開発目標(SDGs)」に沿って、3つの取組部局がそれぞれの専攻分野を活かして、自国の問題の特殊性を自覚した上で、共通の問題にアプローチする能力を養い、新たな価値形成(共創)を実現できる人材を養成することを目指している。そして、人材養成のための各種の教育交流や連携事業の実施を通して、「先進的なアジア型の将来都市構想」と、これを実現する「共創的教育システム」を創造することの双方を目的としている。

上述のような経緯から本事業の総体としては、3つの取組部局が6カ国15校の連携校との間で、多様な形式や内容の派遣/受入プログラムを複層的に実施してきている。これらは一見すると3部局が別々に取組みを併走させているように見えるかもしれないが、以下のような共同の取組みを複数の機会を設定することにより、各々の取組みを相互に参照してフィードバックを得る機会を設け、全体構想の目的に向けて各部局の取組みを束ねてスパイラルアップできるように仕組んでいる。

第一は、2017年から毎年8月下旬に本学アセアンセンター

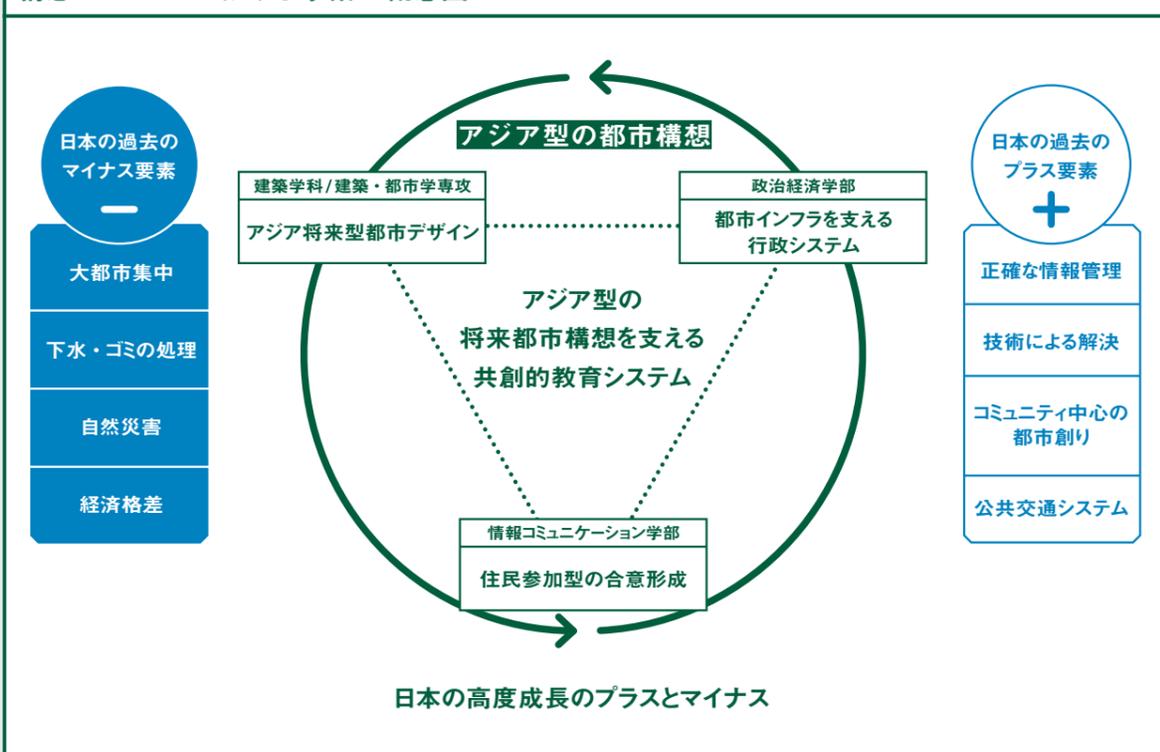
で開催したCLMV学生会議である。例年3日間の日程で実施し、3部局から参加した本学学生と連携校からの参加学生がグループに分かれて、フィールドトリップとしてインフォーマル居住地やそこで活動するNGOや政府機関を訪問した上で、ディスカッションを行うという形式でPBL型体験学習を行った。また、各グループでの議論の成果は、最終日に相互に発表して共有し、参加教員から助言や質疑応答を行なった。また、CLMV学生会議の開催に際しては、参加した連携校の教員による共創FDワークショップも併催された。各種の教育交流プログラムの実践を通して得られた即地的知見を共有・交換し、「アジア型の将来都市構想を担う共創的教育システム」のあり方に関する議論が深められた。

第二は、本学が2017年から3年間連続して11月下旬に開催してきた「明治大学アカデミックフェス」における事業報告会の実施である。アカデミックフェスは本学の持てる「知」の共創と発信を目指した全学的なイベントであるが、そこに「Fly to the World」というセッションを設けて、当該年度に3部局が取り組んできたプログラムやCLMV学生会議について、報告・発表を行った。参加学生代表が活動報告を英語でプレゼンテーションし、各部局の教員からコメントを交換する形式で実施した。この機会により部局毎に行っている各プログラムの実施状況を広く情報発信するだ

けでなく、互いの部局が確認・評価するプログラムレビューとしての機能を組み込んだ仕組みとしている。

第三は、2018年から3年間連続して開催してきた国内PBL型体験学習である。これはCLMV学生会議などの一部としても開催しているPBL型体験学習を、受入れプログラムで来日する留学生向けに国内で実施しているものである。東京オリンピックに向けて都心部で進行する主要駅周辺の大規模都市再開発プロジェクトを生きた教材として取り上げ、留学生が本学の日本人学生と共に実際のプロジェクトを訪問して体験し、プロジェクトに関わっている事業者や設計者と意見交換を行うことにより、成熟期の都市開発を目指して進行するプロジェクトを多面的に学ぶ機会を提供している。2018年度は三菱地所やUR都市機構の協力のもと大丸有エリアを対象に、2019年度は東急の協力のもと渋谷駅周辺エリアを対象に実施した。2020年度はJR東日本の協力のもと高輪ゲートウェイ駅周辺エリアを対象に実施予定であったが、コロナ禍の影響で実空間での実施は断念し、実施時期を変更した上で2021年1月にオンラインで開催した。なお、2020年度はCLMV学生会議やアカデミックフェスにおける発表会も実施できなかったため、これらで取り入れられている学生のグループディスカッションやプログラムレビューの運用要素も組み入れての実施となった。

構想フェーズにおける事業の概念図



2017年アカデミックフェス。「Fly to the World」のセッションでCLMV学生会議の報告。



2019年国内PBLプログラムにて渋谷駅周辺再開発エリアの視察・訪問。

分野を超えた知の共創：アカデミックフェス
明治大学国際連携機構特任講師 後藤克史

伝統的な「知」の集積と発展は高度に体系化される中で分野毎に進歩してきたが、かつて無いほどの情報技術の発達、社会システムの変化に対応するために、分野を超え学際的な教育の場、研究者、テーマが求められています。明治大学が2017年度から3年連続して開催してきた「アカデミックフェス」では学生数3万人を超える総合大学としての利点を生かし、分野を超えた新しい「知」のかけ合わせによる高次の価値を生み、柔軟かつ自由なネットワークにより可能な共創的コ

ミュニティの構築の機会です。加速する社会変化を予見し、未来を構築する知識や技術を問うことで、産官学連携によるイノベーションが期待されるなか、世界展開力事業からは「Fly to the World」と題されたセッションを設け、CLMV学生会議、共創FDワークショップの報告を通じて、PBL教育システムの学際的一面を示しました。このように「アカデミックフェス」は明治大学の未来の社会に向けた次の一手の発表の場となっています。

Programs for Re-Inventing Project in Department of Architecture

多層的に展開された派遣／受入プログラムの概要

本事業ではCLMV諸国を含むアセアン地域との連携強化が謳われていたため、採択前から定常的な交流があったNUSやINDAに加えて、新たに連携校の拡充等を行ない、教育交流を展開することとなった。既に大学間協定校だったラオス国立大学 (NUOL) とは交流の強化を確認するとともに、カンボジア工科大学 (ITC)、王立芸術大学 (RUFA)、ヤンゴン工科大学 (YTU)、ホーチミン市建築大学 (UAH) の4校と新たに協定を締結し、これら6カ国7校の連携校と事業を実施した。これら7校は各国を代表する大学であり、5年間に渡ってその学生や教員と継続的に交流を深められたのは、本学にとっても大きな資産になったと考える。

3つの派遣プログラムは、全て夏季休業中に実施されたが、本学の6年制カリキュラムとの相応関係も考慮して、3つの異なるレベルのプログラムで構成されているのが特徴である。以下にその概要と開発主旨を簡単に紹介しよう。学部2～3年生対象の国際実習 (建築版) は、理工学部が先行して開発した国際実習を、建築分野の特性に合わせて変更したものである。理工学部版は、本学アセアンセンターを基点として各種講義や工場見学等から構成される内容で2015年から段階的に実施していた。その実施に協力してきた過程で、建築分野の特性を反映させて都市空間を生きた教材として用いたPBL型学習を組み込める発展性が認識された。そこで、本事業の採択を契機に、既存の理工学部版の仕組みを共用した上で、約半分の内容を増補・変更してプログラムを開発した。また、引率する教員も建築学科の各分野からバランス良く参加してもらい、特定の分野に偏らず参加を受け入れる方針を明確にし、また海外プログラムに参加した経験のない初学者も含めて、幅広い学生が参加するプログラムに発展させることができた。

学部4年生対象のチュラロンコン大学短期留学は、部局

間協定に基づく学生交換として実施されるものだ。INDAからは秋学期に4名の学生を継続的に受け入れてきたが、学年歴やカリキュラムの制約で、本学から派遣する学生はほとんどない状況が続いていた。この不均衡の課題を解決するために協議した結果、学生交換の枠組みで5週間程度の短期留学を実現する方針となった。学年暦のズレにより8月中旬から学期が始まるのを活用して、8月初旬から9月初旬まで留学し、INDAの設計スタジオを履修するというプログラムを開発した。このような形態ならば、本学学生は夏季休業中に無理なく参加することができる。そして、I-AUDに進学予定の4年生には、このような英語での教育機会が適切な助走と受け取られたようだ。また、滞在期間中となる8月下旬には、3つの取組部局共同のCLMV学生会議が実施されるため、合わせて参加する機会を得ることとなった。

大学院修士1年生対象の2都市型ASEAN国際共同ワークショップは、夏季集中演習科目「設計スタジオ3 (設計スタジオC)」の中核として、従来からアセアンセンターで7月末～8月上旬に実施していたワークショップを、戦略的に改変・拡充して開発したものである。運用実績のある既存骨格をベースとして、CLMV諸国の都市 (第一都市) に課題対象地を設定して前半を実施した上で、アセアンセンターの立地するバンコク (第二都市) に移動して後半を実施するという8日間のワークショップを開発した。第一都市は、2017年ホーチミン、2018年ヤンゴン、2019年プノンペン、2020年ピエンチャンと巡回させ、各都市に立地する連携校との共催する予定とした。(残念ながら2020年はコロナ禍のため中止となった。) 2都市型ワークショップには、連携校からも学生と教員が参加し、本学の学生や教員と共同作業を行なった。学生は各校の学生と交流し共に学び、各校の教員から指導を受ける機会を得た。加えて、教員は共同

4年間の学生交流実績	2016年度		2017年度		2018年度		2019年度		2020年度		計	
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
1 国際実習 (建築版)			12		22		18				52	
2 チュラロンコン大学 建築学部短期留学	11		9		7		12				39	
3 2都市型ASEAN国際共同ワークショップ	12		16	(16) ^{*1}	13	(17) ^{*1}	17	(15) ^{*1}			58	(48) ^{*1}
4 CLMV学生会議 ^{*2*}			8	7	7	6	12	6			27	19
5 交換留学		6		6		6		6				24
短期留学 (DEX Inbound等)				14		28		20		10 ^{*5}		72
国内PBLプログラム ^{*4}						2 ^{*3}		26	4 ^{*5}	40 ^{*5}	4	68
6 交換留学	3(1) ^{*4}		4(1) ^{*4}		3(0) ^{*4}		2(1) ^{*4}				12(3) ^{*4}	
短期留学 (DEX Outbound等)	21		5		4				11 ^{*5}		41	
年度小計	47	6	54	27(16) ^{*1}	56	42(17) ^{*1}	61	58(15) ^{*1}	15	50	233	183(48) ^{*1}

^{*1}: 2都市型ASEAN国際共同ワークショップの受入れ人数は域内交流
^{*2}: 派遣欄は本学参加者、受入欄は事業対象校参加者
^{*3}: バリ国立建築大学・ヴィレットからの参加者 (世界展開力強化事業非対象校)
^{*4}: () 内の数値は世界展開力強化事業対象校
^{*5}: オンラインでの実施のため、派遣欄は本学参加者、受入欄は事業対象校参加者
^{*6}: 建築学科および建築・都市学専攻の実績のみ掲載

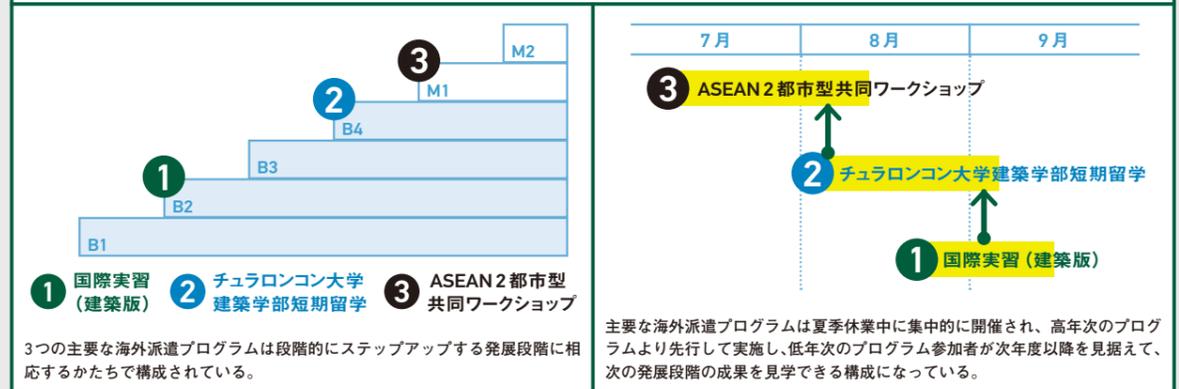
で指導する機会を得るとともに、期間中に各種の議論を深めることができた。いわば共創FDワークショップの建築版がビルドインされ、学生・教員両面からの人材育成を見据えていた点も大きな特徴である。さらに、前後に各1日の事前学習・事後学習を設定し、都市の実情を知るフィールドトリップや企業・団体と連携したPBL型体験学習を開発して実施したのも大きな特徴となった。

3つの派遣プログラムは、数日ずつオーバーラップして計画され、参加者に前のプログラムの最終段階の成果を見る機会を提供した。高年次から低年次の順に実施されるので、参加者は先輩の成果を見てから自らのプログラムに参加することになる。加えて、PBL型体験学習では、各都市

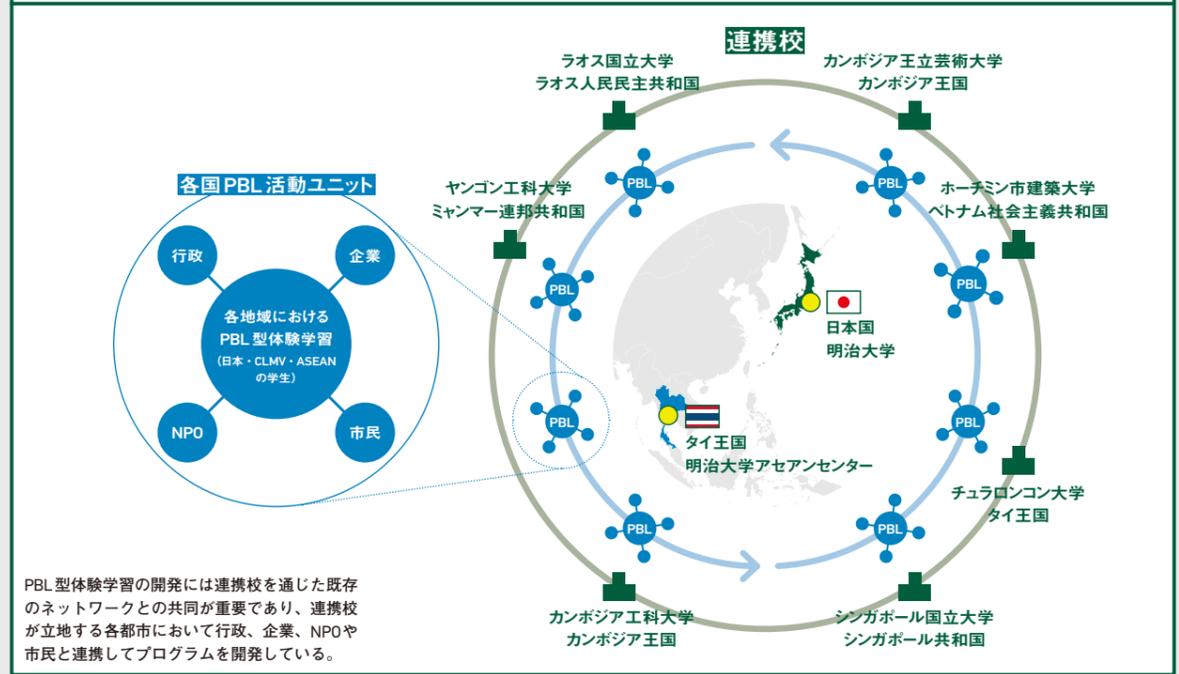
で仕事に携わる先輩から直接話を聞き、体験から学ぶ機会を提供した。この構成により、先輩の活動をロールモデルとして認識し、それを糧として学びを深めることができる。言い換えると、3段階の構成によって、初学者にもアプローチしやすく、段階的にステップアップが可能で、その先の高次の発展を支援できる仕組みを提供している。

誌面の関係で受入プログラムは詳述できないが、基本的には同様の主旨に沿って、短期受入、交換留学受入などのプログラムを組み合わせることで、留学生が来日中のタイミングに国内PBLプログラムを提供することで、東京という都市に立地する本学の特徴を活かしてプログラムを展開することとなった。

派遣プログラム構成図



PBL 型体験学習ネットワーク概念図



建築学科 / 建築・都市学専攻における大学の世界展開力強化事業
Programs for Re-Inventing Project in Department of Architecture

01 国際実習(建築版)

「国際実習(建築版)」は世界展開力事業の開始を期に、2015年度から理工学部複合領域科目として開講されてきた「国際実習」タイ・プログラムをベースに、共通の研修・実習を残しつつ、より建築・都市に特化した内容に改変して開発し、実施してきたプログラムである。理工学部建築学科2、3年生を対象とし、理工学部版との共通実施部分として現地大学教員や駐在員からの講義・日系企業訪問・学生交流・意見交換会を実施し、これらを通してグローバルな環境で活躍する活動に触れる機会を提供した。また、建築独自のプログラムとして、街歩きと演習、ディスカッションを通じて都市環境を観察し、独自の視点を養う機会を提供した。このプログラムで得た知識と経験が、グローバルな環境で国際的に通用する建築・都市学分野の職業人になるための基礎となることを目指している。

1900年までは世界人口の10%が都市に住んでいるに過ぎなかったが、現在は世界人口の半分は都市部に住んでいると言われる。アジア地域はヨーロッパ、北米南米に比べて比較的都市人口は少なく、40～48%程度だが、都市部への人口流入のスピードはかつて無いほどの速さで進んでいる。本実習が開催されるバンコクはタイ国の都市部の80%を占め、アセアン地域ではジャカルタに次ぐ人口規模をもつ。この現実は今後に向けた可能性であると同時に、各都市に共通する大気汚染、交通渋滞、住宅・都市問題など多様

な問題が生じる可能性を含んでいる。よって、建築独自のプログラムでは、建築・都市学分野で、今後学生たちが直面するであろう問題への関心を即地的に養うことを目指した。建築版のプログラムは下記の4つの骨幹からなる。

1. 日系ゼネコンの建設現場訪問と駐在所員とのラウンドテーブル・ディスカッション
2. グループ毎にバンコク市内を建築的視点から考察、都市への問題提起を目的としたフィールドワーク
3. 本学4年生が短期留学しているチュラロンコン大学建築学部訪問とスタジオ講評会の傍聴
4. バンコクに拠点を持つ建築設計事務所の訪問

特筆すべきは実習に参加している2,3年生がチュラロンコン建築学部で留学している4年生のスタジオ講評会を聴講することにある。すでに1ヶ月近くバンコクに滞在・留学している4年生との交流や情報共有を通じて、将来の自分ごととして留学への興味が湧き、2,3年生にとって海外活動がより身近に感じられるという効果が見られた。

理工学部版と建築版をあわせて定員35名程度に対して2017年度は12名、2018年度は22名、2019年度は18名の参加があり、チュラロンコン大学短期留学、ASEAN2都市型共同ワークショップへと発展的にステップアップして参加する学生も複数見受けられた。

国際実習(建築版)および理工学部版の実績

	2017年度		2018年度		2019年度		2020年度	
	2年生	3年生	2年生	3年生	2年生	3年生	2年生	3年生
建築学科	7	5	18	4	10	8		
理工学部	10	4	9	4	10	4		
建築学科参加者合計	12		22		18		コロナ禍のため中止	



明治大学アセアンセンター前にて、2019年の国際実習参加者とシーナカリンウィロート大学の学生との集合写真。



2018年の国際実習(建築版)において、Plan Architectsを訪問。同設計事務所の代表より設計活動の説明を受ける。

国際実習(建築版)スケジュール

月日	時間帯	プログラム	宿泊
1日目	AM		機内泊
	PM	成田→バンコク(3日夜発)	
2日目	AM	バンコク到着後、アセアンセンターへ貸切バスにて移動	バンコク市内
	PM	アセアンセンターにて安全講習会	
3日目	AM	SWU学生交流プログラム	バンコク市内
	PM		
4日目	AM	チュラロンコン大学建築学部短期留学中の本学4年生による成果発表見学	バンコク市内
	PM		
5日目	AM	アセアンセンターにて現地講義、パネルディスカッション	バンコク市内
	PM		
6日目	AM	フィールドトリップ(アユタヤ)	バンコク市内
	PM		
7日目	AM	在タイ日系ゼネコン建設現場見学	バンコク市内
	PM		
8日目	AM	グループに分かれての建築・都市市内フィールドトリップ	バンコク市内
	PM		
9日目	AM	グループに分かれての建築・都市市内フィールドトリップ	バンコク市内
	PM		
10日目	AM	設計事務所見学(バンコク市内)	機内泊
	PM	出発時間までフリータイム、バンコク→成田	
11日目	AM	東京着、空港にて解散	
	PM		

column 02

世界を視野に～自分の世界を飛び出して～
理工学部建築学科3年 藤生竜季

国際実習に参加し一番最初に感じたことは、私の思っていた「当たり前」は他の国では「当たり前」ではないということです。実習では構造、リノベーションというトピックに沿って、フィールドワークを行いました。日本では柱、梁を用いる構造が普通だが、タイでは地震がないこともあり、梁のないフラットスラブ構造などの建物が多く見受けられました。また、柱の断面が極端に小さかったり、リノベーションの際に追加でブレースや柱を入れる必要もないため、元の建築物を最大

限活かしたリノベーション建築物が多く見受けられました。さらに、タイの学生と交流した際に、「何で日本人はあんなに働いているの」と言われ、働き方なども国により大きく異なることを実感しました。国際化の進む社会の中では、このような様々な「違い」を受け入れて、活かしていくことが重要だと思います。国際実習で自分自身の視野を広げ、自分のいる環境の外に目を向けることがいかに重要なかを知ることができました。

column 03

ちょっと窮屈かも、でもかけがえのない体験を
明治大学理工学部建築学科専任准教授 樋山恭助

私が担当した国際実習、学生に私的な旅行では得られない体験を、という気持ちと共に、講義として単位付与を成立させるため、実習期間中は見学会やPBLプログラムが密に組み立てられ、スケジュール的な窮屈さが否めない約10日間でした。自由こそが学生の特権と感じている自分としては、学生が息苦しさを感じないか心配しましたが…、流石は大学生、

せつせと隙間時間を作っては楽しんでくれたようです。海外旅行は初めてという学生も多い中、安全は守られながら個人では行けないような場所が見学できる、PBLを通し逞しさを身に付け新たな仲間にも出会う、ちょっとした窮屈さは十分に回収できるかけがえのない経験と共に自由もちゃんと満喫、程よいバランスのプログラムだったと思います。

02 チュラロンコン大学建築学部短期留学

「チュラロンコン大学建築学部短期留学」は本学理工学部との学部間協定に基づく交換留学として、同大学建築学部国際デザイン・建築プログラム（INDA：the International Program in Design and Architecture）に本学の学部4年生を毎年10名程度、8月初旬から9月初旬まで5週間派遣するプログラムである。留学期間中はINDAの4年生前期の正規設計演習科目（Architectural Design Studio 4）をINDAの4年生と共に履修する。

5週間の留学期間は、大学院1年生対象の「2都市型ASEAN国際共同ワークショップ」のバンコクで実施される最終部分のワークショップに、オブザーバーとして関わり、最終講評会に参加することからはじまる。また、本ワークショップ終了後の翌日には事後学習が実施されるため、これに大学院生と一緒に参加し、バンコクの設計事務所やハウジングプロジェクトを訪問する機会を得た。内容は毎年異なるが、このように2つのプログラムの重複期間を効果的に活用して学年を超えて参加する学習機会が提供されており、本留学生はいち早くバンコクに慣れることができるよう配慮されている。

INDAでの設計演習科目は指導教員毎に少人数で課題に

取り組むスタジオ制が採用されている。海外から招聘された多様な経歴を持つチューターによる8つのスタジオは、多様な学生の興味と世界の建築学の動向を的確に捉えた内容となっている。本留学生は提供される8つのスタジオから各自の興味に沿って希望を選択し、チューターとの面接を経て設計演習科目を開始する。設計演習科目は12月までの学期を通じての科目であるが、本留学生はその正規科目の前半となる3分の1程度を履修することになる。そして留学期間を終えた段階で、各スタジオごとに成果発表会を行い、留学中の設計演習課題を終える仕組みとなっている。この成果発表会には、例年本学科2,3年生を対象とした国際実習（建築版）の参加者がオブザーバーとして参加し、自身の近い将来をイメージできる体験を提供することにより、段階的に次年度以降のプログラムにステップアップしやすいように配慮されている。

5週間の期間にわたって、ユニークでかつ濃密なスタジオを仲間と一緒に学び、バンコクという都市で生活して過ごす時間は、1週間程度の短期プログラムとは異なる経験や成果を学生に提供することになる。これらは、課題に取り組む意欲だけでなく、現地での生活体験も含めた総合的

な体験からの学びに繋がっているようで、それは帰国後の成果発表にも現れており、単なる語学力習得以上にプレゼンテーション力、コミュニケーション力の向上がみられた。また、正規科目の設計演習前後の期間には、各自の建築的・都市的な興味に基づいた計画に沿って自主学習が行われた。成果発表で、自主学習の報告と関連するかたちで

個々の視点からの掘り下げた発表も見られ、そこからも留学中の充実した生活を伺うことができた。

留学期間中には本学の3部局共同による「CLMV学生会議」がバンコクで3日間開催されるスケジュールとなっており、本留学生は原則としてCLMV学生会議にも参加する機会を得ることとなっている。

チュラロンコン大学 スタジオ課題・指導教員リスト (2019年)
A Chthulucenic Feast : Recipes from a thick present by Alicia Lazzaroni
R. R. - R. I. : Future(s) Perfect 3, Speculative critical design in real estate by Antonio Bernacchi
The Corridor : A living Museum of National Diversity by Chon Supawongse Monumental Wastelands by Deborah Lopez Lobato
Botanical Futures : Gianmaria Socci
Landscapes for Ornament : Translating the Indentitarian Traits of Bangkok's Markets by Lorenzo Perri
Augmented Architecture 01 : Interplay of Digital + Physical Environments by Surapong Lertsithichai
The Long Journey : Space for Travelling by Tijn van de Wijdeven

短期留学スケジュール

月	日	プログラム
8月	4日	成田→バンコク（夜行便）
	5日	バンコク到着後、チュラロンコン大学学生寮へチェックイン アセアンセンターにて短期留学ガイダンスおよびASEAN 2都市型共同ワークショップへオブザーバーとして参加
	6~7日	2都市型ワークショップにオブザーバーとして参加
	7日	チュラロンコン大学建築学部、スタジオガイダンス
	8日	2都市型ワークショップの事後学習に参加
	9日	スタジオ選抜に際してポートフォリオのプレゼンテーション
	10~13日	自主学習期間
	14日	スタジオの開始
9月	23~25日	CLMV学生会議への参加
	4日	チュラロンコン大学、スタジオ合同講評会及びピンナップ
	5日	自主学習
	6日	チュラロンコン大学、スタジオ展示、および国際実習（建築版）に参加の2,3年生に対するプレゼンテーション
	7日	アセアンセンターにて短期留学終了の報告
8日	帰国日、バンコク→成田	

短期留学参加学生実績

	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度
参加人数	9	7	12	コロナ禍のため中止



2018年チュラロンコン大学建築学部短期留学生によるスタジオプレゼンテーション。同年国際実習（建築版）参加者は発表にオブザーバーとして参加（手前）。



2019年チュラロンコン大学建築学部短期留学。指導教員Antonio Bernacchi氏のスタジオとピンナップ形式のディスカッションが行われている様子。

column 04

タイ1か月生活 — 語学と建築と

理工学研究科建築・都市学専攻国際建築都市デザイン系1年 島崎 耀

大学生になったころから、将来海外で働いてみたいという夢を持っていた。そんな中、2年生時の国際実習の参加や留学した先輩たちとの交流などを通し、自分も1か月の短期留学に行ってみようと思った。タイでの生活は充実した1か月だった。留学中に履修した建築の設計の授業では「進化するデジタルテクノロジーで都市はどう変わるか」というテーマを動画やアニメーションを作成しながら考えるスタジオを選択し、新しいソフトウェアの使い方を学びながら授業を受けた。なれない英語を使いなが

らも現地の学生やほかの留学生とコミュニケーションをとり、聞き取れなかったときは何度か聞きなおしながら設計課題を進めた。タイでは2人1部屋の寮で、現地ですぐ友人と夜飲み歩いたりもした。留学中にはCLMV会議に参加し、翌年に参加予定の2都市型共同ワークショップの見学もした。この短期留学を通して、より長い期間の留学をしてみたいと強く思うようになり、交換留学でシンガポールに1年間留学することが決まったところだ。

03 2都市型ASEAN国際共同ワークショップ

2都市型ASEAN国際共同ワークショップは、建築・都市学専攻の設計演習科目「設計スタジオ3(設計スタジオC)」の一部として本事業採択前から継続的に国際的実践教育プログラムとして開講してきた科目である。そして、大学の世界展開力強化事業の採択を受けて、その構想を担う主幹的な派遣・域内交流プログラムとして、既存ワークショップを発展的に改変してプログラムを開発し、実施された。

ワークショップの構造・スケジュールは、課題対象地をCLMV諸国の各連携校の立地する都市(第一都市)に設定し、調査・分析などの初期作業を実施した上で、本学アセアンセンターの立地するバンコク(第二都市)に移動して、デザイン、提案および発表を実施するという8日間のプログラムである。第一都市は各年ごとに巡回させ、2017年はホーチミン市、2018年はヤンゴン、2019年はプノンペン、2020年はビエンチャン(コロナ禍のため中止)であり、第二都市はバンコクに固定して行った。規模は本学から学生15名前後、教員5名、6カ国7校の連携校からは学生15名前後、教員7名の総勢42名程度の参加者により実施された。

ワークショップの課題は、東南アジア諸国の急激な人口流入に伴う都市化に関する問題と都市環境更新時に直面する課題の2つを同時に建築・都市デザインに関連付けて扱うこととし、その解決策の提案を求めた。実際にはホーチミン市、ヤンゴン、プノンペン市内の川辺の敷地を課題対象地として設定し、敷地視察や行政関係者等の講演等を行い、それを受けて学生たちは6つの混成グループに分かれて、2グループずつ「Waterfront(水辺の環境整備)」「Post-Industrial(産業地区跡地の再生)」「Housing(住環境整備)」という3つのテーマに取組み、地域の文脈の読み取り、課題

や資源の抽出、将来ビジョンの導出、具体的な都市・建築デザインの提案という一連の作業に取り組んだ。前半の第一都市での作業を受けて中間発表の後にバンコクに移動し、後半は本学アセアンセンターで共同作業を続け、最終日には講評会を実施して、提案発表、講評と意見交換が活発になされた。なお、本ワークショップにおける学生の提案、教員による論考は各年ごとに小冊子にまとめている。(本冊子末尾のURLから閲覧可能)

加えて、ワークショップの前後には、本学からの参加者を対象とした事前学習・事後学習を設定した。都市問題に直結した事象を把握するためのフィールドトリップや企業、NGOや政府機関と連携したPBL型の体験学習プログラムを実施した。具体的には2017年の第一都市であるホーチミンでは日系の設計事務所訪問と公共住宅視察、2018年ヤンゴンではJICAが関わる住宅政策の講義、2019年プノンペンでは日系企業による開発事例視察とモダニズム建築視察を事前学習として実施した。第二都市であるバンコクではタイ政府機関CODIのインフォーマル住宅改善プロジェクト視察、National Housing Authorityによる住宅開発視察および日系組織設計事務所訪問等を実施した。

また、ワークショップ期間中には参加教員による「共創FDワークショップ」を実施した。国連で採択された「持続可能な開発目標(SDGs)」や国際連合人間居住計画(UN HABITAT)による活動計画を前提として、アセアン主要都市の都市開発のあるべき姿や専門家の国際協働による参画の可能性について議論を深めるとともに、各国での建築・都市学の教育の改善やアセアン地域内のモビリティ向上のための連携への取り組みについても議論を行った。

2都市型ASEAN国際共同ワークショップ実績

	2017年度		2018年度		2019年度		2020年度	
	明治	連携校	明治	連携校	明治	連携校	明治	連携校
学生	16	16	13	17	17	15		
教員	5	5	5	7	5	7		
参加者合計	42		42		44		コロナ禍のため中止	

Column 05

理論と実務の学びによる、人が生きる環境の創造

理工学研究科建築都市学専攻国際建築都市デザイン系2年 茂木明日香

2019年2都市型ワークショップ、カンボジアプノンペンに参加しました。

社会・経済・都市構造に関する事前学習の学びを踏まえ、現地WSに参加。日建設計タイランドの訪問では現地の生産システムの違いに触れ、ASEANの実態について理論から実務まで一連で学ぶ、非常に濃密な経験でした。

WSではカンボジア・ベトナム・ミャンマー・日本出身の5名

から成るグループで、敷地対岸のベトナムスラム調査や低所得層コミュニティでのインタビューを実施。Post industrialをテーマに、Revitalization through the experience of Morality、地域住民が建築施工プロセスに参画しモラルを形成するプランを提示しました。周辺コンテキストと安易に迎合するのではなく、社会的格差に焦点を当てたことは、まさに広い意味でのデザインの可能性を探求する機会となりました。

移動日	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目	8日目	9日目	10日目	移動日
		第一都市(ホーチミン/ヤンゴン/プノンペン)				バンコク、明治大学アセアンセンター					
09:00		オープニング				アセアンセンター集合、ガイダンス					明治大学学生対象の事後学習
10:00		オリエンテーション ブリーフィング	グループワーク	グループワーク	設計対象敷地を再訪問	グループワーク	グループワーク	グループワーク	グループワーク・ プレゼンテーション準備		
11:00											
12:00		休憩・昼食				休憩・昼食					
13:00			基調講演	グループワーク			グループワーク	グループワーク			
14:00		設計対象敷地訪問			グループワーク	グループワーク					
15:00			グループワーク								
16:00				中間発表						最終講評会	
17:00		グループ分け	グループ毎に 講評			グループ毎に 講評	テーブル ディスカッション	テーブル ディスカッション			
18:00											
19:00					バンコクに 空路で移動						
20:00		交流会	グループワーク	交流会		グループワーク	グループワーク	グループワーク	交流会		
21:00											
22:00											



明治大学アセアンセンターにて2018年2都市型ASEAN国際共同ワークショップ参加者による集合写真。



2018年2都市型ASEAN国際共同ワークショップ、ゲストクリティックを交えての最終講評会。

Column 06

2都市型ワークショップについて

明治大学理工学研究科建築・都市学専攻兼任講師/DESIGN FIRM 高橋潤

通常の設計では対象地の問題点や可能性を洗い出し、そのうえでコンセプトを固めデザインを行うが、具現化された形からより深い理解や新たな認識が生まれ、そうしたコンセプトと形の相互フィードバックの結果最終提案に至る。この2都市型共同ワークショップでは、東南アジアでのジェネリックな問題と可能性、かつ対象都市の固有なそれらを射程に入れ、6都市から参加した国籍も人種も異なる学生及び教員が、約

10日間という短期間でコンセプトと形の相互フィードバックを行うため、当然議論は白熱し、新たな価値観と多様な視座を実感する、大変ダイナミックで刺激に富んだワークショップとなった。提案案はいずれも建築・都市デザインにおける大いなる実験であり、その成果がこのプログラムの意義を自明のものとしている。

04 CLMV 学生会議／共創FDワークショップ

世界展開力事業に参画している3部局は6カ国15校の連携校との間で、独自の派遣・受入プログラムを複層的に実施してきた。これら並走する3部局の取組みを相互に参照し、フィードバックを得て有機的に関連させ、事業の全体構想が目指す目的に向けた共同作業を行う機会として「CLMV学生会議、共創FDワークショップ」は企画され、毎年開催されてきた。

2017年8月に第1回目をタイのバンコクに位置する本学アセアンセンターにて開催し、2018年度、2019年度と全3回開催した。具体的には日本とCLMV諸国の学生が協働することで、〈1〉異なる視点から自国の問題を理解すると同時に、自国の問題の特殊性を自覚し、〈2〉経済や技術の発展段階を超えて共通の問題にアプローチできる専門知識や能力を養い、〈3〉言語や文化の違いを超えて現実的な合意や価値の形成（共創）を実現できる「持続可能な都市社会を支える共創人材の育成およびその教育課程の創造」が目的である。

3日間のプログラムでは、CLMV学生会議と共創FDワークショップを、本学アセアンセンターを主たる会場として、並行して同時に実施した。学生と教員の混成グループに分かれてのフィールドトリップでは、タイの政府機関The Community Organizations Development Institute (CODI)やNGO機関シーカー・アジア財団を訪問し、政府および民間レベルでのインフォーマル居住区への支援についての講義を受けるとともに、視察フィールドワークを行うという構成であった。

CLMV学生会議では本学の学生と海外交流大学の学生が、4グループに分かれて、「貧困」「交通」「観光」「市民参加」の各領域に関連した都市問題を討論した。学生間での異なるバックグラウンド、価値観がより討論をチャレンジングなものとしたが、時間の経過と共に互いの理解を深めた。また参加教員からの多様な助言もあり、実りの多いグループディスカッションとなった。最終日のラップアップセッションにおいて、各グループ毎に定めたテーマに沿って問題点、解決策についての発表を行った。2019年度は以下の4つテーマに基づいて議論を深めた。

- Path to Safe, Sustainable, Inclusive, Resilience Society
- Urban Planning and its Civil Participation for Sustainable Urbanization Development
- Comparison of Urbanization Issues with CLMV,

Japan and Thailand

• Japanese Experience & Solution on Urbanization Issues, and Assistance to ASEAN Urbanization

参加した学生は、個人の経験・専門やバックグラウンドを超えて、経済発展の段階が異なる各国が抱える都市化に伴う問題点を皆で共有し、解決策を学生同士で協議し、考え、プレゼンテーション資料にまとめるという作業を集中的に行った。この体験を通して、各地域の特徴に根差した発展・開発・解決策の重要性を改めて認識する重要な機会となった。

共創FDワークショップはCLMV学生会議と同時並行で行われ、参加教員によるプレゼンテーションや討議が行われた。まず、連携校からの招聘教員により各専門分野における各国の都市化に伴う問題点にかかるプレゼンテーションが行われた後、「アジア型の将来都市構想」に向けた教育力の向上や意識共有に係る活発な議論・意見交換が行われた。さらに、将来的に国際的な視座と地域に根差した高度な知識を併せ持つ人材の育成に向けた共創的教育システムについての協議が行われた。ラウンドテーブル形式でオープンな議論が行われ、本学と連携校の教員間の連携をより一層強固なものとすることができた。そして、3回の共創FDワークショップで重ねてきたことで、協議内容に基づき都市化に伴う課題の解決へ向けた政策提言をまとめる準備を行った。

フィールドトリップは初日に3日間のプログラムの議論の共通基盤を作るために実施された。具体的な視察対象地として、NGOや政府機関が開発・改善や社会活動を行っているインフォーマル居住区等を訪問した上で、関係者を交えてのディスカッションを行うというPBL型体験学習を実施した。CODIを訪問したグループは水上から運河沿い低所得者層居住地と家屋の改善事例を視察し、CODIが提供する小規模金融とコミュニティ貯蓄制度の仕組みについて議論をした。シーカー・アジア財団を訪問したグループは徒歩でクロントゥーイ地区を視察し、家屋と地区内の通路改善前、改善後の違いを実際に体験した。また、財団にて地区の開発や社会活動に関する議論をするとともに、財団のサポートを得てコミュニティが運営している土産屋を訪問した。政府機関、NGOの関係者を交えて、且つ現地にての実施形態・方法に関する議論する形式でPBL型体験学習とした。

CLMV 学生会議参加実績 (取組3部局の合計)

	2017年度		2018年度		2019年度		2020年度	
	明治	連携校	明治	連携校	明治	連携校	明治	連携校
学生	59	19	42	16	29	21		
(うちオブザーバー)	27	0	21	0	4	0		
教職員	11	8	10	11	10	10		
参加者合計	97		79		70		コロナ禍のため中止	

スケジュール

移動日	1日目	2日目	3日目		
09:00	アセアンセンターにて参加者登録	学生によるフィールドワークのプレゼンテーション	ラップアップセッション		
10:00	オープニングセレモニー				
11:00	共創FDワークショップ 1	共創FDワークショップ 2	CLMV学生会議セッション 2		
12:00	休憩・昼食	休憩・昼食	フェアウェルパーティ		
13:00	移動日	共創FDワークショップ 2	CLMV学生会議セッション 2		
14:00					
15:00				フィールドワーク	帰国
16:00					
17:00					



2019年共創FDワークショップ2日目。明治大学と連携校の教員でのラウンドテーブルディスカッション。



2019年CLMV学生会議1日目。フィールドトリップにてNGO機関シーカー・アジア財団を訪問。

Column 07

将来像に相応しいシナリオと大学の役割

CLMV学生会議、共創FDワークショップの開催レポートより

CLMV学生会議、共創FDワークショップは、東アジアおよび東南アジア地域の各都市におけるサステナビリティ、都市化に関連する問題を議論する目的で開催されている。会議では発展を遂げた国と都市（特に日本とシンガポール）の都市化に関する政策や技術に重点を置いて紹介し、他の諸国にとってはその政策や技術は手本として導入するのに値するとの議論がなされた。しかし、両国においても喫緊の問題があり、CLMV諸国を含むASEAN諸国にとっては、将来発展を遂げる過程で同じ過ちを繰り返さないようにすることが重要である。各国で政策や都市計画の位置付けの違いもある中で、それぞれの将来像に相応しいシナリオが必要である。このシナリオを作

り上げることが、本会議で議論された中でもさらなる発展が必要とされる部分であり、各国が克服すべき問題点への解決策は新しくイノベティブな方法でもって各々が持ち得る資源から見出すべきである。未来を担う若い人口層がその資源の最たるものであり、大学や高等教育機関は、市民、政府、民間と共同で問題に取り組むことが出来る独特のポジションにあるため、パートナーシップや共同研究を通じてサステナブルな解決策を導くことが可能である。このことから、特に大学と教育者は、社会やコミュニティの未来を担う人材育成に関して重要な役割を負っているのである。

05 受入プログラム

交換留学

本事業の連携校7校のうち、シンガポール国立大学設計・環境学部とチュラロンコン大学建築学部とは、本学理工学部と学生交換の協定を伴う部局間協定を締結しているため、従前から開始した協定に基づく Semester 単位の学生交換を発展的に拡充してきた。

本学は UNESCO-UIA 建築教育憲章に準拠した6年制のカリキュラムを持ち、その一部として大学院修士課程を英語で提供する国際建築都市デザイン系 (I-AUD) を擁しているため、その科目群と連携させるかたちで、協定校からの受入プログラムを実施している。I-AUDでは、本学が2014年に採択された「スーパーグローバル大学創成支援」の一環としても、欧米の協定校とも学生交流を活発に行っている。具体的には、米国のオレゴン大学やワシントン大学建造環境学部、フランスのパリ国立建築大学ラ・ヴィレット校から定期的に交換留学生を受入れている。これらの大学では、UNESCO-UIA 建築教育憲章に基づく認証プログラムを有し、大学院生が交換留学の対象だったので、I-AUDに直接学生を受け入れてスタジオ科目を中心に履修し、単位を持ち帰る方法により交換留学を運用している。

本事業における交換留学は、学年暦の整合性の高い秋学期に、シンガポール国立大学 (NUS) から2名、チュラロン

短期留学

短期留学の受入プログラムは、本事業が進行する5年間の中で、相手校と内容を段階的かつ発展的に変更しながら継続実施してきた。

チュラロンコン大学 (INDA) は学外からゲスト教員を招いて実施する短期ワークショップ (DEX Workshop) を定期開催しており、1月上旬にバンコクに教員を招聘して実施する (DEX Inbound) と併せて、5月下旬に国外に学生を送り出して実施する (DEX Outbound) を実施していた。そこで、本事業の作成時には、この DEX と連携して、短期受入を実施することが想定され、受入プログラムの運用がスタートした。当時は、タイから日本へのビザなし渡航が解禁される前だったこともあり、東京で実施するプログラムは強い訴求力をもっていた。ただ、5月下旬は本学では春学期中であり、受入学生との教育交流を実施するにあたっては、いくつか難点があったのも事実である。

その後、2018年9月にはアジア建築家評議会 (ARCASIA) 第18回アジア建築家大会 (ACA18) が、本学駿河台キャンパスを主たる会場として開催される機会に恵まれた。この際に、会期中に学生ジャンボリーが企画され、本事業の連携校6カ国を含むアジア各国から多くの学生が東京を訪れる企画がある機会を活用して、連携した事後学習プログラ

ムを本学側で提供して学生受入れを行うこととした。特に、当時カンボジアには、ARCASIAの加盟団体が存在しなかったため、ACA18の主催者でもある日本建築家協会 (JIA) とも協議の上、本事業のカンボジアの連携校2校 (RUFA と ITC) から学生ジャンボリーに受け入れる枠を提供していただき、合計28名の参加を得て短期留学受入プログラムとして実施することができた。

また、ACA18の一部として ACAE (ARCASIA 建築教育委員会) との共催で開催したシンポジウム「建築教育と実務におけるモビリティの新たな潮流」のパネラーとして来日した UAH の教員との協議が急速に進み、UAH の学生の短期受け入れプログラムを開発して同年度中に試行することになった。そして、翌年の2019年には同プログラムを RUFA との2校共同短期受け入れプログラムとして拡充して実施することができた。

これらの受入プログラム開発と実施にあたっては、国際実習、国内 PBL 体験学習などの開発・運営の過程で培われたノウハウが多く投入されている。そして、東京という都市が建築・都市学を学ぶ学生たちにとって、訴求力のある生きた教材である点も、このプログラムの成功の要因であったと考えられる。

また、ACA18の一部として ACAE (ARCASIA 建築教育委員会) との共催で開催したシンポジウム「建築教育と実務におけるモビリティの新たな潮流」のパネラーとして来日した UAH の教員との協議が急速に進み、UAH の学生の短期受け入れプログラムを開発して同年度中に試行することになった。そして、翌年の2019年には同プログラムを RUFA との2校共同短期受け入れプログラムとして拡充して実施することができた。

これらの受入プログラム開発と実施にあたっては、国際実習、国内 PBL 体験学習などの開発・運営の過程で培われたノウハウが多く投入されている。そして、東京という都市が建築・都市学を学ぶ学生たちにとって、訴求力のある生きた教材である点も、このプログラムの成功の要因であったと考えられる。

国内Project-Based Learning (PBL) プログラム

国内 PBL プログラムは、3部局合同でバンコクの明治大学アセアンセンターにて行ってきた「CLMV 学生会議、共創 FD ワークショップ」に追加する形で、2018年度より連携校からの受入プログラムとして開催してきた。バンコクでの学生会議、FD ワークショップではアジア各国が抱える都市化に伴う問題点を共有し、日本を含むアジア各都市の将来像を議論する機会を提供してきた。これに対して、国内 PBL プログラムでは、東京オリンピックに向けて首都圏で進行する主要駅周辺の大規模再開発プロジェクトを生きた教材として取り上げた。来日中の留学生を主な参加者として、本学の日本人学生と共に実際のプロジェクトを訪問体験し、プロジェクトの主事業者や設計者と意見交換を行うことにより、成熟期の都市開発を目指して進行するプロジェクトを多面的に学ぶ機会を提供した。

第1回目の2018年度は独立行政法人都市再生機構 (UR 都市機構) と三菱地所株式会社及び株式会社三菱地所設計 (三菱地所) の訪問を実施した。UR 都市機構では、精巧に作られた東京湾岸エリアを中心とした都市模型にて東京臨海部を中心に進行中の事業、東京の都市づくり及び再開発を学んだ。大手町・丸の内・有楽町エリア (大丸有エリア) では、開発・再開発を進めてきた三菱地所より、大丸有エリアのまちづくりや常盤橋の再開発について紹介を受けた。また、「大手町・丸の内・有楽町地区まちづくりガイドライン」に基づいた、商業施設とオフィスビルが複合した開発や仲通りを中心とした歩行者のための都市空間の整備を題材として、PBL プログラムを開催した。

2019年度は東急株式会社および関係各社 (東急) の協力

のもと、渋谷駅周辺再開発エリアの視察・訪問学習を行った。渋谷駅周辺で進行する一連の大規模な再開発事業は100年に一度といわれる規模であり、複数の鉄道駅や河川などのインフラ再整備と連動して民間開発を進行させるための東京都のデザイン協議の仕組みや渋谷駅中心地区デザイン会議の取り組みについて学んだ。東急の担当者から現場事務所で説明を受けた後、渋谷ヒカリエに常設されている都市模型により再開発エリアで進行する各事業の特徴を把握し、立体的に整備・再生された都市空間について建設現場を訪問しながら見学した。過去の都市の記憶を継承しながら、渋谷川沿いの空間を整備・再生し、新しい渋谷を象徴する都市開発を体験する PBL プログラムとなった。

2020年度は当初、供用開始された JR 高輪ゲートウェイ駅と周辺エリアの開発計画を題材としたプログラムを実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響により連携校からの留学生受入が中止になったため、慎重に検討を重ねた結果、オンラインでの実施となった。東日本旅客鉄道株式会社 (JR 東日本) 及び設計者である Pickard Chilton、設計共同企業体 (JR 東日本建築設計、JR 東日本コンサルタンツ、日本設計、日建設計)、株式会社トライポッドスタジオに協力を頂き実施した。67名がオンラインで参加し、各種の講義とブレイクアウトルームに分かれてのグループディスカッション、また、設計者と事業者への質疑応答を通じて、開発の主旨や進め方について学んだ。近隣住民や周辺地域の歴史・成り立ちに配慮された開発・まちづくりを目指していることを理解し、その経緯と各関係者の想いが伝わる PBL プログラムとなった。

受入プログラム実績

	2016年度		2017年度		2018年度		2019年度		2020年度		計	
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
5 交換留学		6		6		6		6				24
短期留学 (DEX Inbound 等)				14		28		20		10 ^{**5}		72
国内 PBL プログラム ^{**6}						8(5) ^{**3}		29	5 ^{**5}	41 ^{**5}	5	78
年度小計		6		20		42		55	5	51	5	174

^{**3}: () 内の数値は2名のパリ国立建築大学ラ・ヴィレット (世界展開力強化事業非対象校) と3名の本学政経学部学生の参加者を便宜的に受入欄に記載
^{**5}: オンラインでの実施のため、派遣欄は本学参加者、受入欄は事業対象校参加者 ^{**6}: 建築学科および建築・都市学専攻の実績のみ掲載

明治大学の PBL プログラムに参加して

カンボジア王立芸術大学講師 Sophanna Kim 氏へのインタビューより

カンボジアの建築を学ぶ学生にとって明治大学の PBL プログラムに参加することは大変意義がありますが、加えて日本で得られるであろうすべての経験が魅力的でした。2019年度のプログラムでは渋谷駅周辺の再開発を訪れ、特に地上と地下をつなぐ公共空間、プラザ、歩行者通路の構成が印象に残っています。プログラム後、参加グループは大阪、京都を訪

しましたが、渋谷で起こっている様な開発が大阪でも見られました。2020年度はオンラインでの開催でしたが、王立芸術大学の学生は駅周辺地区の再開発への興味を示して参加しました。TOD (Transit Oriented Development) のコンセプトは新旧の地域と開発をつなぎ、公共と民間の相互作用を生み出す可能性を見いだせました。

06 大学の世界展開力強化事業の波及効果

アセアン地域の都市への再訪、そして再会

2016年度の採択を受けて、本事業に中心的に関わっている教員たちは、協定の締結から始まり、各種の送り出し／受け入れプログラムや国際共同ワークショップの開発や実施のために、アセアン地域の都市への訪問を幾度となく繰り返すこととなった。本稿執筆時で最後の海外出張から1年以上経過しているのに、ずいぶん昔のことに感じられるが、当時は授業等のない休業期間中に海外出張に出るのが常態化していた。

そのような数々のアセアン地域の都市への訪問の中で、多くの印象的な場所を訪れたり、現地で様々な人材が活躍している様子を垣間見ることができた。そのような体験を少しでも本学の学生と分かち合おうという意図もあってか、一部の教員の研究室では、ゼミ旅行の訪問先として

連携校の立地するホーチミン市やプノンペンを目的地に選び、ワークショップやPBL型体験学習の開発過程で生まれた人的ネットワークを活用して、有意義なスタディツアーを実施している。そして、そのような再訪の際に何よりも嬉しいのは、過去にワークショップなどに参加した現地の学生と再会する機会を得たり、今後日本にやってくる予定の学生と出会ったりすることである。このような事業では計画的に交流を進めている面もある一方で、本事業では多層的な交流事業を複数年に渡り継続して実施しているため、人的ネットワークが網目状に重なりながら成長していく様子を感じ取れる瞬間が、再訪そして再会の中に含まれているのだ。

世界各地の都市で活躍する人材育成への発展性

概要説明でも述べたように、本事業の夏季送出しプログラムは、3つの異なる学年向けのプログラムが相互に期間をオーバーラップしながら、階段状にステップアップできるように構成されている。各プログラムは、アセアン地域6カ国7校との緊密な連携の上で実施しているが、訪問する都市での多様なPBL型体験学習を組み込んで実施している特徴がある。この運営上の特徴は、学生たちにロールモデルとなる先輩たちの活動に触れてもらい、近未来の自分の将来像を想像しながら学び、さらに先の展開へと羽ばたいてほしいという考えから生まれたものである。この場合の先輩には、社会人として活躍している多様な人材も含まれ、本学の卒業生たちと出会う機会も複数あった。

それがどの程度功を奏したかは定かでないが、本事業を足がかりに、世界の都市での長期留学やインターンシップへと歩を進めるケースもみられる。本学ではこの10年ほどの間に、学生交換を設けた協定校を充実させてきており、協定留学を活用して、シンガポール国立大学、パリ国立建

築大学ラ・ヴィレット校、ワシントン大学(シアトル)などの有力大学に半年から1年留学する学生も現れている。さらには、文部科学省の「トビタテ!留学JAPAN 日本代表プログラム」の奨学生として、インターンシップ等と組み合わせ、ムンバイ、バルセロナやニューヨークという都市に滞在し、貴重な経験を得ることができた学生も現れている。また、米国テンプル大学大学院へ進学し、5年半で本学の学士号と先方の修士号の2つの学位を取得できるDBMDプログラムも既に構築されているので、近い将来第1号の学生が現れることが期待されている。

参加した学生の多くは20代の前半だろうが、このような時期に世界の様々な場所で、困難に立ち向かいながら何かを達成する経験をするのは貴重なことである。そして、その時に体験を共にした友人とは将来へ向けて長く付き合うことになるだろう。そのような経験やネットワークを積み重ねながら、世界で、または世界を視野に入れて活躍できる人材の育成が進むことが期待される。



インフォーマル居住区を視察訪問。CDFの職員、コミュニティリーダーと研究者グループでの集合写真。2020年1月プノンペンにて。



田中研究室の2019年9月のゼミ旅行で、ベトナム・ホーチミン市を訪問。ホーチミン市建築大学の教員や学生の皆さんと再会して交流を深めた。

国際共同研究プロジェクトへの発展

本事業が進行する5年間の期間には、様々なレベルでの交流が同時に進んできたといえる。2都市型ワークショップはその代表的な例といえるが、学生のための教育交流が行われる傍らで、共創FDワークショップなどを通して、参加した教員間での議論が進んでいった。それぞれの都市の特徴、すなわち固有の資源や課題について、そして、一定の時間的位相のズレはあるものの、共通して発生する課題や可能性についての議論などが深められた。また、毎年のワークショップ、PBLプログラムの準備のために連携校が立地する都市を訪れ、対象敷地を探すための調査、担当教員間で議論を進めてきたことや、NGO、行政機関や日系・現地設計事務所とのネットワーク構築も、本事業の目的達成に向けた議論の深化のためには有用であった。

このような過程で参加している連携校の教員間の関係性も深まり、学術的な関心領域の共有も進んでいった。そして、本事業から生まれた研究面へのスピノフとして、連携校であるUAHとRUFAの教員と本学の教員が参加する研究ユニットが立ち上がり、国際共同研究プロジェクトがスタートしている。PBL型体験学習の実施には現地での行政、NGOや市民の協力が不可欠なのと同様に、現地のリエゾン役の存在も含めた研究サポート体制の充実が不可欠である。よって、本研究では連携校のネットワークにより、現地NGOやコミュニティリーダーの協力を得て研究を実施する計画となっている。2019年度には、本学の国際共同研究プロジェクト支援事業(Ⅱ型)に採択され「東南アジアのインフォーマル居住地改善のための技術と人材の開

発・社会実装に関する基礎的研究」として1年間の研究を実施することができた。そこでは、プノンペンに調査対象地を設定して、従来の現地調査に加えてドローンによる空撮写真を用いたフォトグラメトリによる3次元計測などの調査も実施して、研究を進めた。そして、その成果を発展させて、2020年度からは学外研究資金を獲得して「東南アジアのインフォーマル居住地のレジリエンシィに関する国際協働型研究」として2年間の研究プロジェクトが現在進行中である。さらに発展的には3次元計測技術やBIMなどを組み合わせた推進手法を開発することより、具体的な改善方策を開発・提案し、それを適切なスケールや方法で地域コミュニティに社会実装することを目指している。そして、併せてコミュニティ・アーキテクト等の専門職能像を構想し、その人材開発・育成を目標としている。新型コロナウイルスの世界的蔓延により、海外出張を伴う調査研究を行うのは難しい状況が続いているが、オンライン会議の活用に加えて、現地で取得した空撮写真や3次元計測データの共有により国境を超えた協働型研究を進めているところである。

教育と研究は別物と見る向きもあるが、建築・都市学の分野ではこれら両者は密接に結びついている。特にデザイン領域では、リサーチの成果としてデザインが生まれ、デザインを行う過程でリサーチが深まる場面もある。そのような意味で、上記に紹介したような研究プロジェクトへの発展は、本事業による人的関係の発展形として構想の延長上の可能性を示しているものと言えるだろう。

column 09

フランス留学を通じて得た知見

理工学研究科建築・都市学専攻国際建築都市デザイン系2年 森奈葉

大学四年生の頃に1ヶ月間バンコクにて短期留学した事をきっかけに、様々な都市に触れ自身の見聞を広げたいと思う気持ちが強まり、フランスへの留学を決意しました。留学先の大学の学生はヨーロッパ諸国、アジアなどから来た留学生が多く、グループワークを通じていろんな価値観を持つ人と意見を交わしました。また、大学の授業がお休みの日は南フラン

ス、北欧などへ足を運び、長い期間保存されてきた城壁街から最新設備の建築まで様々な都市を目にしてきました。EU、そして明治大学から頂いた助成金のお陰で、様々な価値観、文化に触れ、日本だけでは得られない経験を得ることができました。

column 10

シンガポール国立大学留学で得た建築・都市を考えるとということ

理工学研究科建築・都市学専攻国際建築都市デザイン系2年 森永朱音

建築や都市を広い視野で学びたいと考え、理工学部間協定留学であれば基礎をつけた上で留学できる上に単位認定もされるので挑戦しました。ほとんどの授業にはグループワークがあり、他の留学生や正規生との会話は建築だけでなく、政治や国際関係等話していました。授業や日常での会話が結果として建築・都市を考える上で重要であることに気づき、この留学を通して、目的である“建築や都市を学ぶこと”に対して

広い視野で学べただけでなく、深く考えることができました。最後に、理工学部事務室の方に親身にご対応いただいた上に明治大学外国留学奨励助成金によって留学をサポートしていただき、安心して留学することができました。このようなサポートがあったからこそ、留学生生活を充実させることができたと思います。

Discussion 01

Masami Kobayashi

アジアにおける国籍を超えて連携した研究教育について

明治大学理工学部建築学科専任教授 小林正美

大学教育の国を超えた地域内流動化については、1990年に締結されたポローニャアコードに則り、すでにEUを軸としたヨーロッパ圏内においては活発に展開され、単位互換制度に関わる応用実績が多く報告されている。例えば、フランスの大学の学生がスペインやイタリアの大学に短期留学し卒業単位を得るといった事例が当たり前のように見られるようになった。特に都市や建築の分野においては、異なった文化や生活環境を経験し探求することは、机上で学習したことや研究内容に多様な価値観を持ち込むことにより、内容の実体化を強化し、国際的感覚を養うなどの重要な効果があることは誰もが認めるところである。

さて、アジアにおいては、今まで相対する協定校間の交換留学などは盛んに行われてきたが、まだ包括的な単位互換の合意システムが構築される状況には至っていない。一方、アセアン地域においては、1995年に締結されたASEAN University Network(AUN)のような大学間のアライアンスがすでに構築されており、今後アジア圏内における建築系大学を包括的にカバーする単位互換制度の構築を目指し、様々な連携がますます進展することが予測されている。そのような環境の中で、過去5年間に渡って実施されてきた世界展開事業による「ASEAN2都市型共同ワークショップ」および「CLMV学生会議」は、参加した学生のみならず、参加した教員達が、各国が抱える諸課題を共有理解し、共に解決方法を探り、今後のビジョンを考察するという貴重な機会を生み、今後のアジアにおける教育研究の「知的ネットワーク」構築に向けて多大な効果を与えてきたことは間違いない。

特に、2020年度は、世界を巻き込んだコロナ禍のために、実際の対面型ワークショップは休止されてしまったが、逆に、個別にリアルタイムオンライン国際シンポジウムなどが通常生活の中で実施できたことは大きな収穫であった。今後、オンライン講義などによる単位互換制度がさらに進行し、研究教育界においては、大学の枠や国籍による境界がますます低くなることが予想される。これからは、コロナ禍の負の部分払拭し、新たな価値創造のために「世界展開力事業」で植えた小さな種を大事に育てていくことを、関係者一丸となって進めていきたい。

政治・経済・空間の融合から未来社会の創発を目指して

シンガポール国立大学デザイン・環境学部講師(2019年当時) 田村順子

アジアの都市空間を見つめてみると、政治・経済・空間が融合された時に社会は創発されるのではないかと考えるようになった。例えば二十世紀初頭にロンドン郊外で計画された田園都市理論の概念。このモデルをほぼ完璧に実現させたのがシンガポールの国土計画である。都心に市場を置き、郊外に田園都市を醸めた。政治・経済・空間の融合によってシンガポールは創発されたのだ。こうした観点から学生・FDワークショップ、CLMV学生会議を振り返ってみると、各都市における政治・経済を学ぶとともに、その時代を象徴する諸事情を取り入れながら空間として具象化することを目的としたイベントだったと考えることができる。シンガポール国立大学の教員として参加したヤン

ゴンとプノンベンは、まさしく激動する社会情勢を鑑みながらいかに建築が人々のエンパワーメントにつながるのか？そして未来社会は創発されるのか？といった命題を議論する場であった。若い世代の学生たちが尊ぶ自国の歴史と文化から想い描かれる未来のフィクションを共有できたことが、このイベントを通して最も楽しい出来事だった。果たして空間を通して人々が生活を営む様子や、未来社会の創発を描けたかどうかは定かでない。しかし、ワークショップに参加した学生たちはSNSを通して今も交流が続いている。こうして物語は紡がれ、いずれエピソードは完成されるのだろう。

Discussion 02

Hiroyuki Sasaki

国際教育の成果と今後の課題

明治大学理工学部建築学科専任准教授 佐々木宏幸

明治大学における建築・都市デザイン分野の国際教育は、2013年度の国際プロフェッショナルコース(I-AUD/現、建築・都市学専攻 国際建築都市デザイン系)創設により本格的に始まった。本コースは2年間の大学院プログラムであり、建築・都市デザイン分野における完全英語教育プログラムとして当時の日本では先駆的な取り組みであった。この国際教育は2016年度の世界展開力強化事業の採択により大きく進展する。

世界展開力強化事業の採択は、アセアン諸国を中心とする海外協定校拡充による国際協働の水平展開、学部における交換留学・海外実習プログラムの開発による国際教育の垂直展開の双方を推進した。中でもアセアン諸国の大学との新たな協働機会は、従来の欧米及びアジアの限られた大学との協働ではなし得なかった成果を生み出した。ホーチミン、ヤンゴン、プノンベンへと展開した2都市型ASEAN国際共同ワークショップは、アセアン諸国独自の都市問題を顕在化させるとともに、アセアン諸国間での事情の相違、さらには各WSの対象地区特有の社会的、経済的、空間的課題を発見させ、建築・都市デザインに求められる即地的、複眼的アプローチへの気づきを与えた。

新型コロナウイルス感染症の世界的拡大と移動制限も国際教育の新たな展開への契機となった。2都市型共同WSをはじめとするほぼ全ての海外協働プロジェクトは中止されたが、代替案として大学院や学部のスタジオ、建築英語科目などにおいて、海外協定校とのオンラインワークショップを開催し、場所と時間の共有に依存しない新たな協働を試行した。これらの試みは、地理的距離の消滅というオンラインの強み、時差の顕在化というオンラインの弱み双方を浮き彫りにし、今後の進化への示唆を与えた。

このように、本学における国際教育は、過去8年間で世界展開力強化事業の推進と共に戦略的発展を遂げ、海外大学との多面的な協働を通じ、英語での対話力の向上、国際的協働への物理的・心理的障壁の払拭、国際的に活動する修了生の輩出など多くの成果を挙げてきた。一方、学内外の国際教育基盤が概ね確立された現在は、量的充実から質的充実に移行すべき転換点に来ていると言える。自由な発想や表現技術など協働を通して学んだ海外教育の特長の受容、社会的・文化的教養の涵養による言語のみに依存しない対話力の醸成、物理的移動・対面に依存せず、時差や学習環境格差に影響されない協働方法の確立などが肝要と思われる。

I-AUD開設後8年間の実績・経験・反省を基に、国際教育の次なるステップへと踏み出したい。

交流プログラム実績一覧： https://www.meiji.ac.jp/cip/clmv-asean/program_record.html
2020年度国内PBL型体験学習プログラム紹介動画： https://www.youtube.com/watch?v=dX11RHViRes&list=PL8bCC-xrDXMQpu1mXlGjoUcZhqMELxSDp&index=1
共創FDワークショップ・CLMV学生会議動画： https://www.youtube.com/playlist?list=PL8bCC-xrDXMR4yzd-cjYhGAcxyUgVh5U
共創FDワークショップ・CLMV学生会議報告書： Summary Report Innovative FD Workshop and CLMV Student Conference 23-25 August, 2019： https://www.meiji.ac.jp/cip/clmv-asean/6t5h7p000039ud30-att/CLMV_SummaryReport_2019_text.pdf
Summary Report Innovative FD Workshop and CLMV Student Conference 24-26 August, 2018： https://www.meiji.ac.jp/cip/clmv-asean/6t5h7p000039ud30-att/CLMV_SummaryReport_2018_text.pdf
2都市型ASEAN国際共同ワークショップ： 2017年ホーチミン： https://www.dropbox.com/s/xq37ybil82d163v/ASEAN_ws_01_HCM_180404.pdf?dl=0 2018年ヤンゴン： https://www.dropbox.com/s/2honqab98ex0xh0/ASEAN_ws_02_YG_190708.pdf?dl=0 2019年プノンベン： https://www.dropbox.com/s/gav0dcwy59ic172/ASEAN_ws_03_PP_201019.pdf?dl=0

Contents

- 1 序文 はじめに** 明治大学理工学部建築学科専任教授 田中友章
- 2 明治大学と建築学科／建築・都市学専攻の近年の取り組みと国際化への戦略**
明治大学理工学部建築学科専任教授 田中友章
- 3 平成28年度 大学の世界展開力強化事業、ASEAN地域における大学間交流推進(タイプB)**
全体構想に向けて3つの取組部局による活動を束ねる仕組み
column 01 分野を超えた知の共創：アカデミックフェス 明治大学国際連携機構特任講師 後藤克史
- 4 建築学科／建築・都市学専攻における大学の世界展開力強化事業**
多層的に展開された派遣／受入プログラムの概要
- 01 国際実習(建築版)**
column 02 世界を視野に～自分の世界を飛び出して～ 理工学部建築学科3年 藤生電季
column 03 ちよつと窮屈かも、でもかけがえのない体験を 明治大学理工学部建築学科専任准教授 樋山恭助
- 02 チュラロンコン大学建築学部短期留学**
column 04 タイ1か月生活 一語学と建築と 理工学研究科建築都市学専攻国際建築都市デザイン系1年 島崎 麗
- 03 2都市型ASEAN国際共同ワークショップ**
column 05 理論と実務の学びによる、人が生きる環境の創造 理工学研究科建築都市学専攻国際建築都市デザイン系2年 茂木明日香
column 06 2都市型ワークショップについて 明治大学理工学研究科建築・都市学専攻兼任講師/DESIGN FIRM 高橋潤
- 04 CLMV学生会議／共創FDワークショップ**
column 07 将来像に相応しいシナリオと大学の役割 CLMV学生会議、共創FDワークショップの開催レポートより
- 05 受入プログラム**
交換留学
短期留学
国内Project-Based Learning (PBL) プログラム
column 08 PBLプログラムに参加して カンボジア王立芸術大学講師 Sophanna Kim氏へのインタビューより
- 06 大学の世界展開力強化事業の波及効果**
アセアン地域の都市への再訪、そして再会
世界各地の都市で活躍する人材育成への発展性
国際共同研究プロジェクトへの発展
column 09 フランス留学を通じて得た知見 理工学研究科建築都市学専攻国際建築都市デザイン系2年 森奈菜
column 10 シンガポール国立大学留学で得た建築・都市を考えるとということ
理工学研究科建築都市学専攻国際建築都市デザイン系2年 森永朱音
- 5 論考**
- 01 アジアにおける国籍を超えて連携した研究教育について** 明治大学理工学部建築学科専任教授 小林正美
- 02 国際教育の成果と今後の課題** 明治大学理工学部建築学科専任准教授 佐々木宏幸
column 11 政治・経済・空間の融合から未来社会の創発を目指して
シンガポール国立大学デザイン・環境学部講師(2019年当時) 田村順子

平成28年度 大学の世界展開力強化事業(タイプB)

明治大学理工学部建築学科／理工学研究科建築・都市学専攻における2016年～2021年の記録

FY2016 Re-Inventing Japan Project TypeB

Documentation and Achievement 2016-2021,
Department of Architecture, School of Science and Technology, Meiji University

2021年3月22日発行

発行所 明治大学理工学部
神奈川県川崎市多摩区東三田1-1-1
TEL 044-934-7563(理工学部事務室)

編集 後藤克史(明治大学)

デザイン 宮添浩司(aptp)

印刷 アティックプロモーション

©2021 明治大学理工学部建築学科、理工学研究科建築・都市学専攻
Printed in Japan
本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

本冊子で紹介された事業は文部科学省・平成28年度(2016年度)「大学の世界展開力強化事業～アジア諸国等との大学間交流の枠組み強化～」のタイプBの補助金で実施された事業です。本冊子で表記されている呼称、役職名は発行当時もしくは事業が行われた当時のものです。

「Re-Inventing Japan Project」は2016年採択時点の文部科学省の本事業の英語名称です。採択後に正式名称は「Inter-University Exchange Project」と変更になりました。